

研究種目：基盤研究（C）（一般）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520484

研究課題名（和文）ペリー来航関係画像資料の史料批判的研究

研究課題名（英文）A Study of Images on Matthew Calbraith Perry's Arriving to Japan by the Method to Criticize Historical Materials

研究代表者

嶋村 元宏 (SHIMAMURA MOTOHIRO)

神奈川県立歴史博物館・学芸部・主任学芸員

研究者番号：40261193

研究成果の概要：嘉永6（1853）・7年の二度にわたり来航した、アメリカ東インド・中国艦隊（ペリー艦隊）に関して国内で作成された肉筆画、瓦版、錦絵および古文書、版本に含まれる画像を主たる対象とし、歴史学研究の基本ともいべき史料批判の手法を用いて史料学的研究を行ったところ、『ペリー渡来絵図貼交帖』（東京大学史料編纂所蔵）が基本資料となりうること、ペリーに対してさまざまな表現がなされていることから、ペリーを描いた描く肖像画は、その当時のペリー観、アメリカ観を如実に示す資料として有効であること、ペリー来航関係画像を媒介とした儒者のネットワークの存在が明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	360,000	2,360,000

研究分野：日本近代史

科研費の分科・細目：

キーワード：ペリー、黒船、肖像、ネットワーク、大槻磐溪、高川文筌、儒者

1. 研究開始当初の背景

これまでペリー来航については、開国史研究の一環として、また幕末情報史研究の一環として文献史料による考察を中心として進められてきた。それに対し、来航直後から制作されはじめた、あるいは伝写されたペリー

来航に関する画像を含む資料は、博物館などでの展示及び展示図録への写真掲載、あるいは歴史図書への写真掲載という利用が主たるものであり、歴史研究の「史料」として位置づけられてこなかったのが現状である。そのため、一見して来航直後に制作されたとは

思えない画像が、しばしば博物館などで展示されていることも珍しくなかった。これは、それらの資料について十分な調査をせず、ペリーを始めとした使節団員、異国船など、ペリー艦隊に関係しているものが描かれている画像の制作年代を無批判に江戸時代末期としてきたことに由来するものであると思われる。

ペリー来航関係の画像を一書にまとめたものとしては唯一、大久保利謙監修『黒船来航譜』（毎日新聞社、1988年）があるが、以下で述べる本研究が目的とする点までは踏み込んでおらず、当時展覧会などで利用されるようになった資料を集めた画像集成としての域を脱してはいない。

また、内田欽三「津山藩御抱絵師としての鋏形家—江戸後期における大名家の画人登用と、彼らの活動をめぐって—」（『サントリ—美術館論集』第4号、1993年）、影山純夫「高川文筌論」（真田宝物館編『松代—真田の歴史と文化—』第9号、長野市教育委員会松代藩文化施設管理事務所、1996年）は、美術史研究に見られる一般的な作家論に終始するにとどまり、本研究の中心的課題である、原本と写本との体系的な把握は行われていない。

私が勤務する神奈川県立歴史博物館では、ペリー来航に関する画像資料を早くから収集、保管しており、また、私自身が平成9・10年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「幕末の海外情報と危機意識」の研究代表者としてペリー来航関係の主に文献資料を調査研究している中で、上記『黒船来航譜』所収資料についても調査を行うことができた。さらに当館の調査研究事業の一環として平成12～16年度に総合研究「開国と異文化の交流」（研究代表者：嶋村元宏、共同研究者：W. Steele 他3名）を行い、その成果を、『神

奈川県立歴史博物館総合研究報告書』（神奈川県立歴史博物館、2005年）および私が担当した平成15年度特別展『ペリー来航150周年記念 黒船』（展覧会図録も作製）で公表した。しかし、展覧会という形式もあり、本研究の目的としたことについては踏み込むことができなかった。そこで、当館が所蔵するペリー来航に関する絵巻についての資料調査の成果を、『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』へ「資料紹介 ペリー来航絵巻について」として発表を続けている。

また国外では、マサチューセッツ工科大学教授ジョン・ダワー氏が、自身が所蔵する関係資料を、ホームページで公開し、それをパネル展示として日本においても巡回展示を開催したが、やはり本研究が目的として掲げたことはなされていない。

本研究は、これまで国内外においてこれまで実施されてこなかった調査研究である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、嘉永6（1853）・7年の2度にわたり来航した、アメリカ東インド・中国艦隊（ペリー艦隊）に関して国内で作成された肉筆画、瓦版、錦絵および古文書、版本に含まれる画像を主たる対象とし、歴史学研究の基本ともいえるべき史料批判の手法を用いて史料学的研究を行うものである。

具体的には、以下の5点を目的とした。

- (1) 従来所蔵が確認されている資料以外について、アンケートなどにより全国各地の関係機関および個人が所蔵する本研究の対象となる画像が含まれるペリー来航関係資料の所在を把握する。これまでも、博物館等の展覧会でペリー来航関係資料はよく出品されているが、国内に限ってみてもその全貌は把握されていない。今回の所在調査により、所在データベースを構

築する。

- (2) 所在の判明した資料について、デジタル・カメラ撮影、撮影済みフィルムのスキャニングなどにより各画像資料を電子データとして収集しデータベース化を行う。
- (3) 各資料について以下の点を中心に史料批判を行う。
 - ① その資料の真贋（真純性の批判）
 - ② 資料作成年月日、場所、作成者（来歴の批判）
 - ③ 原本か写本かの差別（本原性の批判）
 - ④ その資料内容の信憑性（可信性の批判）
 - ⑤ 資料としての価値評価（資料の価値の差別・等級評価）
- (4) 古文書の挿図、絵巻などに見られる画像は、いくつかの原図がもとになっているものが多く見られる。しかし、従来このような視点から画像資料を体系的に捉えた研究はないことから、特に、上記(3)の③について、原本と写本との関係を体系的に明らかにする。
- (5) (4)の作業を踏まえ、「画像の伝写」という行為を考察することにより、当時の情報伝達のありようを実証的に解明する。現在、卷子に含まれる画像については、真田藩の絵師と津山藩の絵師になるものが知られている。今日多くの絵巻が伝わっているが、それらは彼らが描いた原図をもとに伝写したものである。つまり、各資料の関係を把握することにより様々なレベルにおける情報交換、および情報の共有の実態（情報ネットワーク）を明らかにすることになる。

3. 研究の方法

2006年度は、上半期に関係資料の所在調査を重点的に行い、下半期に該当する機関の所蔵資料について資料調査を行った。

採択後から9月は、関係資料の所在調査を行った。

過去に行われた展覧会図録および各館の所蔵目録などから、調査対象関係資料をリストアップした。

当初、資料の所蔵に関するアンケートを行い、今までその存在が知られていなかった資料の発掘に努めることも検討したが、大久保利謙編『黒船来航図譜』、『大日本古文書 幕末外国関係文書』所収図あるいは各博物館がこれまで発行した展覧会図録などから、ほぼ調査対象となる資料について確認できたことから、アンケートは実施しなかった。

リストアップにもとづき、下記の資料所蔵先で実物の調査を行った。

- ・ 北海道立文書館
- ・ 市立函館博物館
- ・ 市立函館図書館
- ・ 盛岡市中央公民館
- ・ 一関市立博物館
- ・ 東北大学附属図書館 狩野文庫
- ・ 東京大学史料編纂所
- ・ 早稲田大学図書館
- ・ 下田・了泉寺
- ・ 真田宝物館
- ・ 福井県立図書館
- ・ 福井市立郷土歴史博物館
- ・ 名古屋市蓬左文庫
- ・ 桑名市博物館
- ・ 鎮国守国神社
- ・ 津山洋学資料館
- ・ 安芸高田市吉田歴史民俗資料館
- ・ 広島県立歴史博物館
- ・ 頼山陽史跡資料館

- ・ 福山城博物館
- ・ 福山誠之館同窓会
- ・ 長崎歴史文化博物館
- ・ 長崎大学経済学部附属図書館 武藤文庫
- ・ 鹿児島県立図書館
- ・ 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- ・ 尚古集成館

上記所蔵先においては、すべての資料に対して下記のデータを収集した。

- (1) 資料名（外題、内題など）
- (2) 材質
- (3) 技法
- (4) 寸法
- (5) その他特徴的な事項

また、本研究課題の対象となる資料については、35ミリカラーポジフィルムおよびデジタル・カメラによる撮影を行い、画像の収集に努めた。

さらに、本研究課題の目的の一つにあげたとおり、史料批判の観点から、

- (1) その資料の真贋（真純性の批判）
- (2) 資料作成年月日、場所、作成者（来歴の批判）
- (3) 原本か写本かの差別（本原性の批判）
- (4) その資料内容の信憑性（可信性の批判）
- (5) 資料としての価値評価（資料の価値の差別・等級評価）

の、以上5項目を重点的に確認し記録した。

なお、資料調査にあたっては、絵画を専門とする連携研究者と共同で行い、美術史の視点からのアプローチも試みた。

実地調査に基づき収集したデータをもとに、

- (1) 大名
- (2) 蘭学者

(3) 絵師

(4) 儒者

などの各グループのネットワークに注目しつつ、ペリー来航関係画像の伝写行動について追究した。

4. 研究成果

(1) 実物調査の結果、各画像の伝写行為に関しては、東京大学史料編纂所が所蔵する『ペリー渡来絵図貼交帖』(以下、『貼交帖』)が基本資料となりうることを確認できた。

(2) ペリーを実見して描いた画像とペリーとは似てもつかない天狗のような画像など、一人に人物に対してさまざまな表現がなされていることから、その当時のペリー観、アメリカ観を如実に示す資料と有効であることが確認できた。

(3) 当時のペリー来航関係画像を媒介とした人的ネットワークについては、仙台藩儒者の大槻磐溪が藩主からの命でペリー艦隊の動向を報告するために編んだ「金海奇観」(早稲田大学図書館所蔵)の中に名前が見られる関藍梁および、ペリー来航当時老中であった福山藩主阿部正弘の側用人で福山藩儒者の関藤藤陰とその師である頼山陽などの関係が浮かびあがった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕(計3件)

特別展図録

吉田憲司、嶋村元宏他共編共著、アジアとヨーロッパの肖像、朝日新聞社、2008年9月11日、319p。

国際シンポジウム報告

嶋村元宏、近世日本人の異国認識—憧憬・好奇・畏怖・蔑視、国際シンポジウム「自己の表象、他者の表象—肖像／展示の詩学と政治学、国立民族学博物館主催、2008年9月27—28日。

展覧会広報連載記事

嶋村元宏、特別展 アジアとヨーロッパの肖像 ①ペリーの肖像—人か鬼か—、朝日新聞、2009年2月18日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

嶋村 元宏 (SHIMAMURA MOTOHIRO)
神奈川県立歴史博物館・学芸部・主任学芸員
研究者番号：40261193

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

梅沢 恵 (UMEZAWA MEGUMI)
神奈川県立歴史博物館・学芸部・学芸員
研究者番号：60415966

角田 拓朗 (TSUNODA TAKURO)
神奈川県立歴史博物館・学芸部・学芸員
研究者番号：80435825